

續膝栗毛四編

上

新
へ遠13
1164
30



特

1164
30

信海
野盛
書

本
支

信海
野盛
書

備前栗毛四角扁叙

七年以街を通行せしむ

横川の御園所を省く江に利

水も美濃より道は水も少くする

兵部卿の御所を省くは

其のと限書よおとすは



の誤りて。月より事流し。の山をを工て
 後を留せし。始末今次の茶店より
 馬の矢物二階より七より。所。市。が旅
 行の所の上よりありし。又。方。同下を
 本車。し。も。みの。伊。子。以。協。の。を。向。と。し。
 今。年。の。秋。版。し。し。ち。ち。法。々。あ。り。あ。り。し。し。

木蘇 續膝栗毛四編上卷
 街道



東武 十返舎一九著

市中。小。任。辰。と。ん。れ。バ。隣。家。の。病。人。は。酒。宴。乱。舞。乃
 遠慮あり。偏法華ありて。た。さ。延。は。使。と。そ。合。壁。の
 唐。白。改。痛。と。踏。よ。ひ。と。し。け。は。茶。目。の。外。の。む。づ。ら。ひ。ぞ
 け。が。は。し。そ。れ。は。必。ず。せ。ら。る。の。縁。あり。夜。毎。よ。か。ん。ん。の
 う。け。ら。か。し。の。木。杭。は。魂。ハ。山。野。を。か。け。や。る。り。森。々。八。百
 誰。は。遠。く。あ。り。し。と。法。々。の。尻。々。ひ。初。言。の。末。語。



輝かがやくいびつちのりの利生としきあつこよ。透土とんど幽碑ゆうひ乃
宿やどふも。飢うむどむ寝ねむど。目めよも移うつくの糸いとををかかがが先ま
耳みみよもろくくのめづららしたと感さく楽らくをせん文書しよても
ひととじじよ十年ねんづハ慥しやうよ命を延びつりの請まが合あひり
されどもは珍めづる音調ねん多た八は木き。東海道とうかいどうを引がけの
ええ糸いとよ六狐こゆつつはあところのうら淋しみけまば今を
旅たびから死員いん懐の。近江おうみの境。森もりののがう村むらよいらり。
茶ちや店てんよいらり体ていをこるふ。夫婦ふうふとんえて茶ちやをこ益えき

お出で換か投なけまがかる身あゆたあ人ひとむ

夫婦ふうふして森ののがうへ東國くに由
さぞやひらら一夜のたのしき

おはらち神かみをめたらるそうの男おとこ。コリヤカ猪いんさる粘ねりりん
おののくしらうううあらいのしき
おしきをまててまさらせんごらの粟あわ本もとを来らんと
男おとこめと三さん太た郎らうめがま合て今軽かけくとらちんやん
逐お電でんしらうらふが。それよつねをけしるのうらいのめが
ありらる。とらふてんをくれらんせんコリヤおまぞい



あんなまうなまらんぞ。がらよあめりつらるむひでめらばよ。

ト打らむひ出てもく女むうのほひさし山登り人どんくこびりて
あつらぬ由沢らうーせんそくさせ衣紐もつまそあまひりく

焚火はわよのゆかりもあまらう入るよせんうそあまひりくあまひりく
ひびぞくあまひりくあまひりくあまひりくあまひりくあまひりく

依はよ喧嘩させし二階うら

目ざらうりあまぬるの小使

かくそ今漢とららるそゆくほどまく大園村とよま

らる。たの例よ不破の笑屋の跡ありとてまて。

いふ一へ笑の扉も開ふけん

あまや 鶏卵のふらりくのさと

笑が糸と打越て雞籠山班女花子のまのたよ

傳へましく班女が移やのあまぶとそ

まぐぞ名所の要あまぶ

あのにた小園街道の追分あまらうら。年の比四

だうりの男。本線始の相おま小振えとま。あまの

色と脊負ひ茶茶芭とまげらるが。政よう詞をくは

ひとらうらうらま。あまらうら。あまの男

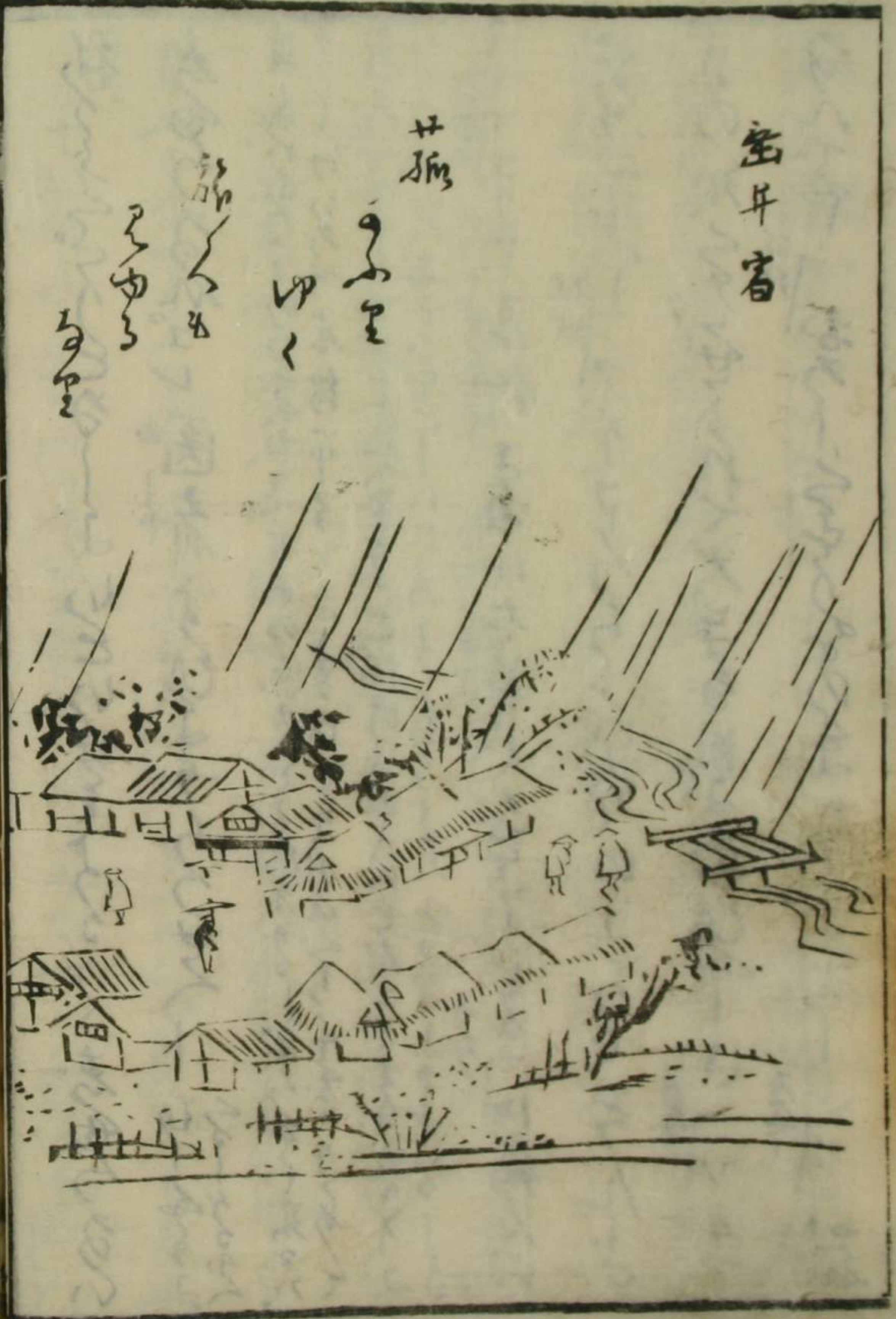
道辺のあのとよんへ
名はよ太吉南



車橋亭

夕の
名の
外

河の
山



出井宿

廿
五

夕の
名の
外

熊取の名のそ残まろ松うえを
さしこののびんる月の編の照

木曾 續猿蓑七四編上巻終



高取

